

# 沖縄方言における 「上二段動詞」活用型の変遷

高 橋 俊 三

はじめに

筆者はかつて拙論「『おもろさうし』における動詞の活用<sup>(注1)</sup>」で、『おもろさうし』では上二段動詞の活用は下二段動詞と同じであり、当時上二段活用が存在しなかったであろうこと、また、現在の首里方言でも、本土の上二段動詞は下二段活用に対応しているといえそうであることを述べた。首里方言に言及したのは、『おもろさうし』には上二段動詞に対応する語は「みちへる・みちゑる」(満ちる。複合語も含む)・「おれる」(降りる)・「とで」(閉じ。名詞のみ)・「もでる」(振る)の4語しか見あたらず、これだけで結論を出すのは不十分だと考え、傍証のつもりで、首里方言を取り上げたのである。しかし、首里方言の上二段動詞の対応語を15例取り上げたただけであつたし、その『おもろさうし』から首里方言の形になる変遷過程についてもこまかく考察しなかった。それで、本論で首里方言の上二段動詞対応語をできるだけ網羅し、上二段活用に関係する全体をこまかく考察したい。

## I 上二段動詞の選別

ここでは20世紀前後の言語を反映した『沖縄語辞典』<sup>(注2)</sup>と、19世紀中頃にベッテルハイムによって著わされた『英琉辞書』<sup>(注3)</sup>とに記載されたものを対象とする。両者ともに首里や那覇の知識層(士族)の言語が基本となっている。後者は前者に比べ、大量の文語および漢語を記載している。

まず、『沖縄語辞典』と『英琉辞書』から、一見した段階で、上二段動詞に対応すると思われる語を抜き出し、主に津波古1992「沖縄中南部方言」<sup>(注4)</sup>を参考にして、本土の上二段動詞に対応する活用(津波古論文の「規則変化第2類8」の「起きる」と同じ活用…以下「上二段活用」と略称)かいなかを検討する。そのポイントは、次のような形である。

- ①普通・終止形(共通語の「連用形+居+む」に対応)の末尾が「jun」である。

- ②普通・打消形（共通語の「未然形＋ぬ」に対応）の末尾が「raN」である。
- ③普通・連用形（共通語の「連用形」に対応）の末尾が「ii」である。
- ④普通・接続形（共通語の「連用形＋て」に対応）の末尾が「ti」である。
- ⑤過去・終止形（共通語の「連用形＋た＋む」に対応）の末尾が「taN」である。
- ⑥継続・終止形（共通語の「連用形＋て＋は＋居＋む」に対応）の末尾が「toon」である。

なお、⑥の形は『おもろさうし』以後に音韻融合した。

### (1) 上二段型活用以外の活用をする語

意味的あるいは語源的には上二段動詞に対応するが、活用としては上二段型活用しない語は、次のようなものである。なお、活用の型あるいは例は『沖縄語辞典』のものをあげ、『沖縄語辞典』にないものは『英琉辞書』をあげることにする。

#### <カ行四段系>

##### ①「飽きる」－「飽く」

『沖縄語辞典』には 2acihatijun, 2acagajun のような複合語の形はあるが、単独の形ではない。『英琉辞書』には、次のように単独の形もある。これからすると本土のカ行四段動詞に対応する活用（津波古論文の「規則変化第1類5」の「書く」と同じ活用…以下「四段活用」と略称。その他、活用の型については同様）である。

○Akán Yósi（飽きない）<insatiable<sup>(注5)</sup>>

○Áku Madi Kányung（飽食する）<surfeit>

##### ②「生きる」－「生きく」

『沖縄語辞典』に「2ici=cun①（自 =kan, =ci）生きる。」とある。カ行四段活用である。これは「生きく」に対応していると考えられる。本土でも古くはカ行四段活用であった。その点では首里方言と同じであるが、「い」と「く」の間に「き」があるのが特殊である。

##### ③「起きる」－「起こる」

『沖縄語辞典』に「2uku=jun①（自 =ran, =ti）（事件が）起こる。起きる。」とある。ラ行四段活用である。

なお、「起これる」という形が、『沖縄語辞典』にも『英琉辞書』にもある。

これは下二段活用系と考えられる。

<ザ行四段系>

④「混じる」－「まじく」・「まじれる」

『沖縄語辞典』に「maN=cuN①（自 =kaN, =ci）混じる。入り混じる。」とある。また、「maziri=jun①（自 =raN, =ti）混ざる。混じる。」ともある。前者は「まじく」（四段活用）、後者は「まじれる」（下二段活用）という形に対応する。

<タ行四段系>

⑤「朽ちる」－「朽つ」

『沖縄語辞典』に「ku=cuN①（自 =taN, =qci）朽ちる。」とある。タ行四段活用である。

⑥「満ちる」－「満つ」

『沖縄語辞典』に「mi=cuN①（自 =taN, =qci）満ちる。」とある。タ行四段活用である。共通語でも古くは四段活用であった。中世以降に上二段活用になったのである。

<ダ行四段系>

⑦「ねぢる」－「ねずる」

『沖縄語辞典』に「nizi=jun①（他 =raN, =ti）つねる。」とある。ラ行四段活用であろう。『宮崎方言辞典』に「ねずる ねじる」とある語に対応している。『英琉辞書』には次のような複合語しか見あたらない。これは「ねずる」より「ねじる」に近い。共通語では「ねじる」は上二段活用するばあいと、四段活用するばあいがある。

○Nidjirinchung;（ねじり込む）<screw>

<ハ行四段系>

⑧「報ひる」－「報ふ」

『沖縄語辞典』には「mukui」という名詞でのみ記載されている。『英琉辞書』には次のような動詞の例がある。「思う」と同じ活用をしていると考えられる。

○Mukuyung（報いる）<requite>

○Máda Mukurang（まだ報われない）<unrequited>

○Ata Mukūti Kukurū Tariung（恨みを晴らす）<wreak>

<バ行四段系>

⑨「延（伸）びる」－「延（伸）ぶ」

『沖縄語辞典』に「nu=buN①（自 =ban, =di）⊖（縮んでいるものが）伸びる。長く伸びる。⊖（期間が）延びる。延期になる。」とある。四段活用の「伸ぶ・延ぶ」に対応している。

⑩「滅びる」－「滅ぶ」

『沖縄語辞典』に「hurubun①（自 =ban, =di）⊖〔文〕滅びる。滅亡する。」とある。四段活用の「滅ぶ」に対応している。

<マ行四段系>

⑪「沁みる」－「そむ」？

『沖縄語辞典』に「suu=nun①（自 =man, =di）しみる。」とある。マ行四段活用である。「suu=nun①（自 =man, =di）深い興味をもつこと。熱中する。gakumunnakai suudoon 学問に熱中している。」とあることなどから、「染む」に対応しているようであるが、「染む」にあたる語は「su=nun①（自 =man, =di）染まる。」とあるので、疑問が残る。

<ラ行四段系>

⑫「借りる」－「借る」

『沖縄語辞典』に「ka=jun①（他 =ran, =ti）借りる。」とある。ラ行四段活用の「借る」に対応している。共通語の「借りる」は江戸時代になって、江戸で生じたものである。今日では、「借る」（四段）は西日本に分布し、「借りる」は東日本に分布している。

(2) 上二段型活用をする語

上二段型活用（「起きる」と同じ活用）をする語は、次のようなものである。上二段型活用をするとともに、他の活用もする語もここで取り扱う。

<カ行上二段系>

①「起きる」

『沖縄語辞典』に「2uki=jun①（自 =ran =ti）⊖受ける。」とある。語幹末が ki なので、オモロ時代はケに対応する音であったと考えられる。

②「尽きる」

『沖縄語辞典』には「尽きる」に対応する語はないが、『英琉辞書』には、次のような例がある。

○Tstchĩyĩüng (尽きる) <exhaust>

語幹末が chĩyĩ なので、語末はキに対応する音である。1例のみなので、移入語(文語)の可能性もある。なお、「尽くれる」という形が、『沖縄語辞典』にも『英琉辞書』にもある。

○çikuri=jun (自=ran, =ti) 費用がかかる。金がついえる。(『沖縄語辞典』)

③「出来る」

『沖縄語辞典』に「diki=jun① (自 =ran, =ti) ⊖ (学問などが) よくできる。」とある。語幹末が ki なのでケに対応している。『おもろさうし』には名詞形ではあるが「いちゑき」という語がある。これは「いでき」の口蓋化した形である。オモロ時代はまだ、カ行変格活用型であったと考えられる。

<ガ行上二段系>

④「過ぎる」

『沖縄語辞典』に「şizi=jun① (自 =ran, =ti) ⊖ 過ぎる。」とある。語幹末が zi なので、ギに対応する音である。

<タ行上二段系>

⑤「落ちる」

『沖縄語辞典』に「2uti=jun① (自 =ran, =ti) ⊖ 落ちる。」とある。語幹末が ti なので、オモロ時代はテに対応する音であったと考えられる。

⑥「満ちる」

『沖縄語辞典』に「mici=jun① (他 =ran, =ti) 満たす。mitasjun ともいう。」とある。また、「戸を閉める」の意の mici=jun も同様なので同じ語源であろう。他方、『英琉辞書』では次のように書かれている。

○Fshĩnchung, Fshĩnchi Mĩtiung; (詰め込む、押し込む) <cram>

○Gakũshung, Saki Tsibu Mitirang Gakũshung (液体の半分だけ入った容器の音) <sound>

『沖縄語辞典』の ci のところが ti である。これからすると、『沖縄語辞典』の ci は直前の i の影響で ti が口蓋化したものと考えられる。すなわち、オモロ時代はテに対応する音であったと考えられる。

<ダ行上二段系>

⑦「怖る」

『沖縄語辞典』に「2uzi=jun① (他 =ran, =ti) 怖じる。こわがる。」とあ

る。語乾末はヂに対応する音である。

⑧「綴ぢる」

『沖縄語辞典』に「tudi=jun①（他 =ran, =ti）○綴じる。」とある。語幹末が di なので、オモロ時代はデに対応する音であったと考えられる。

⑨「閉ぢる」

『沖縄語辞典』には「閉じる」の意味では「kuujun」という語しか見あたらないが、『英琉辞書』には次のような例がある。

○Mi {Kutchi} Kūyung, Tudjūng; (目{口}を閉じる) <shut>

この例を見るかぎりでは、語幹末 dji はオモロ時代はヂであったと思われる。しかし、『おもろさうし』に「とで」という語がある。「世そうとで」<101>に対して「世添ふ閉也」と、また「世もつとて」<同上>に「世の肝要成閉といふ事也」と原注がつけられているので、「とで」は「閉じる」の名詞形であると分かる。したがって、オモロ時代語幹末はデに対応する音であったが、後に dji になったと考えられる。

⑩「恥ぢる」

『沖縄語辞典』には見あたらないが、『英琉辞書』には次の例がある。文語なのであろう。

○Hadjiung; (恥じ入る) <ashamed>

語幹末が djii なので、オモロ時代はヂ・ジに対応する音であったと考えられる。

<ハ行上二段系>

⑪「強ひる」

『沖縄語辞典』に「sii=jun①（他 =ran, =ti）強いる。」とある。語幹が sii なので、オモロ時代にへに対応する音であったか、ヒに対応する音であったか不明である。

<マ行上二段系>

⑫「恨む」

『沖縄語辞典』では「2ura=nun①（他 =man, =di）恨む。」とある。これは四段活用であるが、『英琉辞書』では次のように上二段活用である。本土でも古くは上二段活用であった。

○Uramiung (恨む) <hate>

○Uramitong, (恨む、憤慨している、憤り) <resent, -ful, -ment>

語幹末が mi なので、オモロ時代にメに対応する音であったか、ミに対応する音であったか不明である。

<ヤ行上二段系>

⑬「老いる」

『沖縄語辞典』に「2wii=jun①（自 =ran, =ti）老いる。」とある。語幹が 2wii なので、オモロ時代にイに対応する音であったか、エに対応する音であったか不明である。下二段動詞の「植える」も「2wii=jun①（自 =ran, =ti）植える」で、これと比較しても不明であるということがうなずける。

<ラ行上二段系>

⑭「降りる」

『沖縄語辞典』に「2uri=jun①（自 =ran, =ti）降りる」とある。語幹末が ri なので、オモロ時代はレに対応する音であったと考えられる。事実、『おもろさうし』には「おれる」と表記されている。

⑮「足りる」

『沖縄語辞典』に「tari=jun①（自 =ran, =ti）足りる。」とある。語幹末が ri なので、オモロ時代はレに対応する音であったと考えられる。このように上一段に活用するほかに、「ta=jun①（自 =ran, =ti）足りる。」と四段に活用する場合もある。「足る」（四段）は西部方言で、「足りる」は東部方言であるといわれている。

以上15例が確認できた上二段活用である。これらの特徴は当然のことながら、語幹末尾（「=jun, =ran, =ti」の直前）の母音が i であることである。そして確認しておくべき点は、その i を含む音節が、オモロ時代にイ段に対応する音であったと考えられるか、エ段に対応する音であったと考えられるかということである。整理すると次のようになる。

- (i) イ段音に対応する…②Tstchĩyĩung、④şizi=jun、⑦2uzi=jun、⑩Hadjjung
- (ii) エ段音に対応する…①2ukijun、⑤2uti=jun、⑥mici=jun、⑧tudi=jun、⑨Tudjiung、⑭2uri=jun、⑮tari=jun
- (iii) イ段音とエ段音のどちらに対応するか不明…⑪sii=jun、⑫Uramiung、⑬2wii=jun
- (iv) 対象から外す…③diki=jun

以上のようにエ段に対応するものが多い。このことと、以下に述べるよう

に、上二段動詞の「接続形（中止形）」（連用形＋て）の「て」が口蓋化しないことを考えあわせると、上二段動詞の語幹末はエ段に対応する音であったが、後にイ段に対応するものが生じたと考えるのが穏当であろう。

### (3) 名詞しかない語・対応語がみあたらないもの

「恋いる」、「悔いる」、「錆びる」、「紅葉じる」などは、おのおの「恋」、「悔い」、「錆」、「紅葉」という名詞のみが『沖縄語辞典』に掲載されている。

また、「媚びる」、「懲りる」、「ちびる」、「なじる」、「よじる（攀）」などは、形の上で対応する語はみあたらない。

## II 上二段動詞の変遷

『おもろさうし』では上二段動詞に対応する「おれる」（降りる）の基本形は次のように活用している。<sup>(注6)</sup>（前述したように、『おもろさうし』には上二段動詞に対応する語の語幹末は、「れ」「で」「ちへ」のように書かれているものしか見あたらない。）

語幹	未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
おれ	ら		て	る	る	れ	れ

\*連用形の項の空白は活用語尾がないこと、すなわち、単語全体が「おれ」であることを表す。

これで分かるように、上二段動詞は、すでに一段活用になっている。さらに、連用形・接続形を除いて、ラ行四段活用と同じ活用になっている。

また、下二段動詞に対応する「呉れる」の基本形は次のように活用している。（「呉れる」のみでは全活用形の例が足りないので、適宜他の語から補って表を作成した。以下同様。）

語幹	未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
くれ	(ら)		て	る	る	れ	れ

\*未然形の「(ら)」は、あったりなかつたりすること、すなわち、「くれ」と「くれら」という2通りがあることを表す。

これで分かるように、下二段動詞も一段活用になっているし、連用形を除いて、ラ行四段活用と同じ活用になっている。よって、上二段活用と下二段活用



とは、ほぼ同じ活用になっている。

他方、上一段動詞に対応する「見る」は次のように活用している。

語幹	未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
み	ら	(り)	ちへ	る	る	れ	れ

連用形に「り」があるのは「射る」という語のみである。「射る」はまったくラ行四段活用になっている。以上のことから、上一段動詞、上二段動詞、下二段動詞の順にラ行四段活用化が進んでいるといえる。

接続形は、上二段活用と下二段活用では「て」であるが、上一段活用では「ちへ」である。この「ちへ」は、「て」の直前の母音 i の影響で口蓋化した音をうつしているのである。問題はなぜ、上一段活用と上二段活用でそのような相違が生じたかということである。

この淵源は、上代において、上一段動詞の連用形などの「き」「ひ」「み」は甲類の万葉仮名で書かれていて、上二段動詞のそれは乙類の万葉仮名で書かれていることにあると考えられる。

服部四郎はすでに1932年に次のような卓見を披瀝しておられる。<sup>(注7)</sup>

次に注意すべきは、[akiti] [miʃiti] (おのおの「開けて」「見せて」の首里方言…引用者) などの [ti] が [tʃi] とならないのは当然であるが、[amiti] [ukiti] (おのおの「浴みて」「起きて」の首里方言…引用者) などの [ti] が [tʃi] とならないことである (本節第12項参照)。これによって思うに、『甲類の「ミ、キ」に当る音節の [i] は次の t を tʃ に変ずるが、乙類の「ミ、キ」に当るものは変じない』という法則があるのではなからうか。もしそうだとすれば、「奈良朝の仮名づかいではその区別が失われていたが原日本語には「じ、い」にも二種類の区別があり [kuziti] [wi:ti] の zi, i は乙類の「じ、い」に当る故 ti を tʃi に変じなかったのだ」ということにならぬとも限らない。動詞に限らずいろいろの単語について方々の方言を調査しなければならない。(上二段動詞のこれらの形は、下二段動詞のそれに類推して ti が保たれたのかも知れない。)

後者の類推説より、前者の甲類と乙類の二種類の区別があったので ti が保たれたとする説が正しいと思われる。

『おもろさうし』では、名詞のばあい、イ段乙類の音はイ段甲類と同様にイ段の平仮名で書かれているが、まれではあるがエ段の平仮名で書かれているも

のもある。<sup>(注8)</sup>例えば、「木」は複合語において「き」と表記しているが、多くは「け」で表記している。他方、ア（ヤ）行・ハ行・ワ行のエ段音はイ段音と混同して表記された例がある。例えば「揃えて」を「そろへて」、「そろゑて」、「そろいて」と表記している。

これらのことを総合して考えると、次のような仮説がたてられる。『おもろさうし』の書かれる少し前は、イ段甲類の母音は i ~ji であった。それで、その直後の子音が口蓋化する現象が生じた。イ段乙類の母音は i であった。それで、その直後の子音が口蓋化する現象は生じなかった。上二段活用の接続形が「て」であるのは、その故である。エ段甲類と乙類の母音は合流して ë ~je になり、さらに『おもろさうし』ころは i となり、イ段乙類と同じになった。上二段活用の語幹末尾音がエ段の仮名（例えば、前記の活用表の「れ」）で表記されているのはそれ故である。ア（ヤ）行・ハ行・ワ行のエ段音は i となった。首里方言などでは、『おもろさうし』以後に、イ段音とエ段音はすべて i となった。

『おもろさうし』ではラ行四段動詞に対応する「まぼる」（守る）などは次のように活用している。

語幹	未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
まぼ	ら	り	て	る	る	れ	れ

『おもろさうし』以後に、「り」の子音 r が規則的に脱落するようになった。それにしがつて、連用形の「り」も「い」となって、二段活用とラ行四段活用とは同じになった。（仮名で活用表を作成すると同じにならないが、上記の活用表を音韻記号で表記し、例えば、連用形の ri の r までを語幹とし、i: を活用語尾とすると、二段活用と同じになる。）

なお、「-iri-」の環境においては r は脱落しないので、ラ行四段活用でも「要る」「知る」などは別の活用をするが、この点については、別項で取り扱うことにする。

## む す び

本土（特に九州地方）における動詞活用型の分布状況との関係を考察する必要がある。例えば、『大分県史 方言篇』（61頁）によると、大分県の県北部地方以外の地域では、「起ケン・起ケタ・起クル・起クチャー・起キー」（命令形「起キー」は「起けよ<イ>」の音変化した形）のように下二段活用となってい

る。これと『おもろさうし』における「おれる」（降りる）などとはどのような関係があるのであろうか。また、個々の動詞の活用型の変化と比較する必要がある。例えば、「飽きる」が首里方言では「飽く」にあたる活用をしていることと、本土での「飽く」から「飽きる」へ変遷したことを比較する必要がある。これらは今後に残された課題である。

### 〔注〕

- （注1）高橋俊三，1987，「『おもろさうし』における動詞の活用（三）」（『沖縄国際大学文学部紀要』第十五巻第一号。一部改めて『おもろさうしの動詞の研究』に再録）
- （注2）国立国語研究所，1963，『沖縄語辞典』（大蔵省印刷局。なお引用は1998年の8刷による）
- （注3）B.J. ベッテルハイム，1851，『English-Loochooan Dictionary』（自筆稿本、大英図書館所蔵）。
- （注4）津波古敏子，1992，「沖縄中南部方言」（『言語学大辞典』第4巻）。
- （注5）『英琉辞書』からの引用は、方言、（ ）付きの和訳、< >付きの所出見出し語の順とする。また、『英琉辞書』の方言は語頭を大文字にする。ベッテルハイムの方言の表記法については、拙論「『英琉辞書』の表記法」（『南島文化』第17号，1995年，沖縄国際大学南島文化研究所）を参照されたい。
- （注6）高橋俊三，1987～1990，「『おもろさうし』における動詞の活用」（一）～（六）（『沖縄国際大学文学部紀要』第十五巻第一号～第一八巻第一号。一部改めて『おもろさうしの動詞の研究』に再録）。以下、『おもろさうし』の活用はこれによる。
- （注7）服部四郎，1932，「『琉球語』と『国語』との音韻法則」（『方言』2ノ7, 8, 10, 12。『日本語の系統』に再録。引用は後者の326頁による）。なお、次の論文も参照されたい。  
服部四郎，1979，「音韻法則の例外—琉球文化史への一寄与—」（『日本學士院紀要』第三十六巻第二號）
- （注8）高橋俊三，1987，「『おもろさうし』に於けるエ段音とイ段音」（『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』第六巻第一号。『おもろさうしの動詞の研究』に再録）